比　較　文　化　論

No. 41

日本比較文化学会第45回全国大会

2023年度国際学術大会

発表抄録

於 北洋大学 本館

（対面＆オンライン ハイブリッド開催）

2023年　5月　20日（土）

日本比較文化学会
The Japan Association of Comparative Culture

〈海外提携学会〉
韓国日本文化学会
台湾日本語文学会
淡江大学村上春樹研究センター
台湾日本語教育学会
台湾応用日本語学会

（後援）
苫小牧市役所
北洋大学

日本比較文化学会第45回全国大会・2023年度国際学術大会プログラム

比較研究１：苫小牧観光施設見学

・日時：2023年5月19日（金）

・行程： 11：00新千歳空港（希望者のみ）→12:00 苫小牧駅北口集合→「ぷらっと港市場」にて昼食と買い物（各自） →「ウポポイ（民族共生象徴空間・国立アイヌ民族博物館）」にてアイヌ文化体験（2000 円） →18：00頃苫小牧駅前到着

「夕食会」苫小牧駅前（3000 円）

比較研究２：シンポジウム、研究発表等

・日時：2023年5月20日（土）

・会場：北洋大学 本館（苫小牧市錦西町 3-2-1）

・スケジュール

9:00～9:50　理事会（理事のみ）（本館２F 教授会室）

9:30　一般受付開始

午前の部：10：00～12：00

10:00～10:50　総会（C102教室）

11:00～12:00　シンポジウム（C103教室）

テーマ「比較文化の原点」

LUNCH （北洋大学カフェテリア）

午後の部：13：00～18：00

13:00 開会の辞（C103教室）

開会校挨拶　北洋大学理事長　松尾英孝

大会委員長（奥村訓代）

13:00～13:50記念特別講演：（C103教室）

香山リカ（北洋大学客員教授）

「都市の医療とへき地医療――自らの経験を通して考察する」

14：00～17：40　研究発表（本館１・２F 各教室にて）

17：50閉会の辞（C103教室）

懇親会の部：18：00 より 北洋大学カフェテリアにて

シンポジウム「比較文化の原点」

11：00～12：00　C103 大教室

司会

北海道支部

植田尚樹（北洋大学准教授）

パネリスト

１．関東支部/東北支部代表

木鎌耕一郎（神戸松蔭女子学院大学教授）

比較文化の原点を考える

―戦後のカトリック教会とユダヤ教の宗教間対話を例に―

２．中国四国支部/九州支部代表

公文素子（高知大学非常勤講師）

「比較の原点」を考える

３．台湾日語教育学会代表

邱若山（台湾静宜大学非常勤教授、台湾日語教育学会理事）

台・日比較文化の「原点」について―言語、文学などを通して考える

４．台湾日本語文学会代表

曽秋桂（淡江大学教授、台湾日本語文学会理事）

比較文化の原点―不可欠な AI 技術の利活用

５．関西支部/中部支部代表

二村洋輔（至学館大学助教）

「Lost and Found in Comparison：比較することの限界と可能性」

研究発表

教室１（C103 教室）（翻訳/日本語教育、文体）

1 部 14：00～15：30　　司会　佐藤和博（弘前学院大学教授）

・王子涵（同志社大学文化情報学研究科博士後期課程）山内信幸（同志社大学教授）

『狂人日記』の 10 編の日本語翻訳本の比較分析

・馮一峰（北洋大学専任講師）

構文的重複語の中国語訳について

・河内健志（前橋工科大学専任講師）斎藤隆枝（帝京大学専任講師）

AI 翻訳・自動評価システムは何ができないのか

2 部 15：40～17：40　　司会　山内信幸（同志社大学教授）

・佐古恵里香（流通科学大学特任講師）山内信幸（同志社大学教授）

第 2 言語習得研究におけるオノマトペ習得に関する一考察

―日本語母語話者と日本語学習者のオノマトペ産出例の印象評価分析―

・山本茉莉（同志社大学博士前期課程）山内信幸（同志社大学教授）

チャプター冒頭の「状況の it」が持つ談話機能

・柳燁佳（同志社大学大学院博士後期課程）山内信幸（同志社大学教授）

個人文体と作品ジャンルの関係性研究

―著者識別タスクにおける正答率比較を通じて―

・山本真司（同志社大学大学院博士前期課程）山内信幸（同志社大学教授）

プロレタリア文学作品とプロレタリア児童文学作品における文体の計量分析

教室２（C102 教室）（日中文法・文学比較/日本語文法、文構造）

1 部 14：00～15：00　　司会　神崎明坤（西南女学院大学教授）

・王天保（台湾国立高雄科技大学副教授）　　オンライン

日中同形語に関する一考察－日本語の「個性」と中国語の“個性”の比較を通じて―

・蘇欣（東北大学国際文化研究科博士後期課程）　オンライン

沈章文（東北大学国際文化研究科博士後期）

日中同形動詞「拡大」“扩大”の意味用法に関する一考察

2 部 15：40～17：40　　司会　白鳥絢也（常葉大学准教授）

・陳志文（国立高雄大学　東アジア言語学科教授）

漢字形容動詞の連体形「〇〇な」「〇〇的な」についての考察

・大谷鉄平（北陸大学講師）

BCCWJ における「ブレイク」のふるまいと意味機能

―雑誌記事見出しとの比較を中心に―

・松井夏津紀（京都先端科学大学准教授）

自己像を演出する人称代名詞　―アニメにおける日タイ一人称表現の比較―

・ズルフィカル・ラーマン（中国・四国支部／広島大学人間社会科学研究科博士課程後期）

インドネシア語と日本語における依頼表現の対照研究

教室３（C203 教室）（宗教・哲学/朝鮮・韓国ドラマ・映画）

1 部 14：00～15：30　　司会　山田利一（北洋大学特任教授）

・森下一成（東京未来大学教授）

沖縄における梵字碑の語意と真言宗との関わりについて

・桐生信（錦西ふる里の家教会 司式牧師）

伝統的キリスト教の可能性

・マヴィークムブラ・カルロヴァー・ペトラ（チェコ・パラツキー大学助教）　オンライン

Buddhism in karate life and practice of Srilankan Buddhist karate practitioners

（発表言語：英語　　質疑応答：日本語も可能）

2 部 15：40～17：40　　司会　福本達也（北洋大学教授）

・石俊彦（東北大学大学院・院生）

2016 年以降の中国における韓流ドラマの受容

・李恵慶（大阪経済法科大学 研究員）　オンライン

北朝鮮・ジェンダー・映画　―ラブコメディ『金ドンムは空を飛ぶ』を手掛かりに―

・呉恩英（済州大学校人文科学研究所　学術研究教授）

在日朝鮮人の文化活動 ―金坡禹の演劇運動を中心に―

・李鳳（北海商科大学准教授）

「（さ）せていただく」と「하다(hata)」の日韓対照

教室４ （C107 教室）（西洋文学/日本文学）

1 部 14：00～15：30　　司会　高坂京子（立命館大学教授）

・仲矢信介（東京国際大学 国際関係学部准教授）

モーム『剃刀の刃』と二つの映画化作品

・那須野絢子（常葉大学 外国語学部英米語助教）

「雪女」にみるアンデルセンの影響

・原田寛子（福岡工業大学教授）

現代小説における女性の老い：英語圏文学と日本文学を比較して

2 部 15：40～17：40　　司会　江口真規（筑波大学人文社会系助教）

・黄如萍（台湾・国立高雄餐旅大學応用日語学科准教授）

横溝正史「面影双紙」論（その 2）

・曾秋桂（淡江大学教授）

「八月の庵―僕の「方丈記」体験」と『風の歌を聴け』から見た文学の原点

―AI 技術と協働し村上春樹文学研究の体系化を目指して―

・葉夌（淡江大学准教授）

村上春樹『一人称単数』に描かれた過去と未来

・風早悟史（山口東京理科大学講師）

『「雨の木（レイン・ツリー）」を聴く女たち』の女性像

−マルカム・ラウリーの作品との比較を通して−

教室５（C105 教室）（英語、英語教育）

1 部 14：00～15：30　　司会　高瀬文広（日本赤十字社九州国際看護大学教授）

・山崎祐一（長崎県立大学教授）

異文化コミュニケーション能力の向上を目指した英語教育の実践

～知識・技能を活用して「話す力」につなぐ～

・飯田泰弘（岐阜大学准教授）

英語力測定テストとして活用する映画：mMET『レベッカ』バージョンを例に

・橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）

日本人英語学習者の文産出における日本語の主題をもつ文の影響に関する一考察

―初級学習者・中級学習者の和文英訳のデータの比較を通して―

2 部 15：40～17：10　　司会　北林利治（京都橘大学教授）

・福嶋剛司（北洋大学専任講師）

項と付加詞における照応形の局所性について

・髙坂京子（立命館大学教授）

オランダにおける複言語・複文化主義と言語教育―英語教育の現状と課題を中心に―

・大井一真（京都外国語大学大学院）

代名詞回避原理における対格と属格の的確性について

教室６（C204 教室）（社会言語、社会文化、国際交流、多文化）

1 部 14：00～15：30　　司会　西川祥一（北洋大学教授）

・関口英里（同志社女子大学学芸学部メディア創造学科教授）　オンライン

メディアを活用した課題解決型プロジェクトによる地域活性化の可能性

――文化力とプロデュース力の向上を目指した取り組み

・郭潔蓉（東京未来大学教授）

ダイバーシティ経営の推進と課題－外国人雇用の実態調査からみる一考察－

・田中真奈美（東京未来大学モチベーション行動科学部教授）

岐阜県可児市国際交流協会フレビアの取り組みの変化

2 部 15：40～17：40　　司会　滝波慶信（北洋大学教授）

・宮辻渉（広島経済大学准教授）

不妊治療と仕事の両立支援を促す組織文化に関する研究

・陳孟宏（国立宇都宮大学博士一年（博士課程））

日本と台湾における音楽と社会運動の関係性

―音楽フェスにおける NGO ヴィレッジから―

・伊藤豊（山形大学教授）

レイチェル・マッキノンとトランス問題

・臺丸谷美幸（水産大学校准教授）　オンライン

JACL 機関紙『Pacific Citizen』にみる日系アメリカ人朝鮮戦争兵士像

――1950 年代日系二世の市民権問題と社会参入

教室７ （C206 教室）（文化比較/近現代史・文学）

1 部 14：00～15：30　　司会　八尋春海（西南女学院教授）

・枦山剛（鳥羽商船高等専門学校准教授）

太平洋戦争勃発前における堀悌吉の軍縮政策とのかかわり

―大角人事での失脚過程と盟友山本五十六との最後の別れまで―

・耿義（宇都宮大学地域創生研究科博士後期）

莫言の「魔術的リアリズム」が映し出すもう一つの中国近現代史

－『赤い高粱一族』『白檀の刑』を手掛かりに－」

・二村洋輔（至学館大学助教）

戦時下帝国日本と英領マラヤにおける戦争文学の＜原住民＞表象をめぐる比較文学的研究：理論的枠組みの整理と批判的検討

2 部 15：40～17：10　　司会　郭潔蓉（東京未来大学教授）

・陳由瑋（北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員）

先住民族の文化財とは―日台の文化財制度を通して考察―

・劉嫦雲（広島大学大学院人間社会科学研究科博士後期課程/（中国）韓山師範学院講師）

社会的展開における潮州工夫茶と日本煎茶道の比較　　オンライン

・賴錦雀（台湾· 東呉大学日本語文学系特聘教授）

台湾と日本の人名文化　－改名騒動から考える－

教室８（C205 教室）（音声・音韻関係/教育、学校）

1 部 14：00～15：30　　司会　植田尚樹（北洋大学准教授）

・侯宜卓（東北大学国際文化研究科言語科学研究講座　博士後期課程 2 年）

食感表現に関する日中オノマトペの音象徴性

・杉本雅彦（東京未来大学教授）金塚基（東京未来大学准教授）

岩崎智史（東京未来大学講師）

高等学校における女子生徒応援部員の発声技法に関する考察

・髙橋栄作（高崎経済大学教授）

津軽弁の音象徴

2 部 15：40～17：10　　司会　金塚基（東京未来大学准教授）

・斎藤隆枝（帝京大学講師）　河内健志（前橋工科大学講師）　髙橋栄作（高崎経済大学教授）

GIGA スクール構想下における公立中学校生徒の ICT 機器使用状況と意識に関する調査

・藤山和久（広島経済大学准教授）

クラスにおける制御と裁量の関係性―高専と大学の比較―

・田島喜代美（常葉大学非常勤講師）　　オンライン

大学生におけるエンゲージメントとソーシャルアントレプレナーシップの関係性について―学生 NPO 法人の活動の検証から検証する

シンポジウム「比較文化の原点」
C103教室　11:00～12:00

比較文化の原点を考える―戦後のカトリック教会とユダヤ教の宗教間対話を例に―

木鎌耕一郎(東北支部　神戸松蔭女子学院大学教授)

比較文化は、異なる文化を比較することであり、学としての比較文化学の成立以前から、人類が行ってきた営みである。この営みは、自己の文化と異なる他者の文化との出会いという場面で行われてきた。その際、人類が少なからず、自己正当化の欲求や警戒心から、他者との間に「境界線」を引き、異質な文化に対する排除や攻撃といった態度・姿勢を示してきたことは、歴史を振り返れば明らかであり、現代社会においてもそのような例は枚挙にいとまがない。したがって、比較文化の原点を問う場面、自ずと比較という営みを行なう主体における異文化に対する態度・姿勢が問われる重要なテーマとなろう。

発題者は、長期的な研究テーマの一つとして、戦後におけるカトリック教会とユダヤ教の宗教間対話の動向を細々と追ってきた。周知のように、西洋キリスト教社会では長きにわたりユダヤ人への排除や迫害が行われてきた歴史がある。しかし、戦後に開かれたカトリック教会の第二バチカン公会議（1962-1965 年）において「キリスト教界の諸宗教に対する教会の態度について宣言」が公布されて以降、とりわけユダヤ教との関係改善の試みが精力的に行われてきた。半世紀以上にわたる、両宗教のいわゆる「宗教間対話」がどのような歩みを経て、現在どのような位置にあるのかを振り返ることで、比較文化の原点を探るヒントを提供できればと願っている。

シンポジウム「比較文化の原点」
C103教室　11:00～12:00

「比較の原点」を考える

公文素子（中四国支部代表　高知大学非常勤講師）

比較による効果には、社会科学的な視点から以下のようなものが考えられる。

① **認知的フレキシビリティの向上**：比較によって、脳の神経回路が柔軟になり、認知的フレキシビリティが向上する。これにより、新しい情報を柔軟に取り込み、創造的な問題解決を行う能力が高まる。

② **信念の柔軟化**：比較によって、自分が持っている信念やスタンスに疑問を持つことがある。これによって、自分の固定観念を柔軟に見直すことができるようになる。

③ **エンパシーの向上**：異なる文化や言語を比較することで、他者の立場や考え方を理解しやすくなり、エンパシーの向上につながる。これは異文化間コミュニケーションにおいて重要な能力である。

④ **組織的学習の促進**：比較によって、組織全体の学習が促進される。組織全体で異なる視点や知識を共有することで、問題解決能力が向上し、組織全体の生産性やイノベーション力が高まる。

⑤ **認知的情報の増加**：比較によって、認知的情報の量が増加する。異なる文化や言語を比較することで、新たな知見が得られ、それが脳内のネットワークを拡大させる。これにより、問題解決や創造性が向上すると考えられる。

以上のように、比較による効果は、認知的フレキシビリティの向上やエンパシーの向上など、社会科学的な効果が高いことがわかる。

次に、日本語教育においても、比較を通じて日本語独自の文化や言語環境についての理解を深めるだけでなく、異なる文化や価値観についての理解を深め、異文化間コミュニケーション能力を高めることができる。また、効果的な教育方法を見出すことができるため、言語学習の効果を高め、グローバル人材としての競争力を高めることができる。

比較は異なる文化や言語を持つ人々がお互いを理解する上で、非常に重要な役割を果たしている。異文化間コミュニケーションがますます重要になる現代社会においては、比較に基づくアプローチが、より多様な文化や言語を持つ人々とのコミュニケーションを円滑に進めるための原点となっている。

従って、比較は文化や言語の交流の歴史に根差したものであり、現代社会においても異文化間コミュニケーションを円滑に進めるための重要な手段として位置づけることができる。

シンポジウム「比較文化の原点」
C103教室　11:00～12:00

台・日比較文化の「原点」について　―言語、文学などを通して考える

邱若山（台湾静宜大学非常勤教授、台湾日語教育学会理事）

日本の殖民地五十年の歴史を持つ台湾で、日台両国の比較文化を論じる場合、「原点」となるものは何か、このパネルで、言葉、地名、文学、サブカルチャーなどを通して考え、考察する。

言葉は文化の根源、或いは文化の具現と言えよう。台湾で使われている台湾語に日本語が外来語として取り入れられ定着した言葉が沢山ある。それは日本殖民時代からの名残とも言えようが、それがそのまま或いは変形、発音転訛したりなどして吸収され、台湾の文化の一部分となった。台日比較文化の「原点」を求める場合、台湾語になった日本語或いは台湾文化の一部分になった日本文化に遡らなければならないものが非常に多い。

日常生活の言葉で、挨拶語の「お早う」「さよなら」など、食文化関係の語彙「刺身」「お酒」など、服装美容関係の用語「シャツ」「洋装」など、居住関係用語の「コンクリート」「たたみ」など、交通用語の「バス」「タクシー」など、道具用語の「ドライバー」「ラジオ」など、親族や人名身分呼称の「おばさん」「先生」など、社会用語の「郵便局」「会社」など、他に個人の心情や行為を表す「気持」「お歳暮」など、医療関係語彙の「デング熱」「注射」など、日本語が植民地時代から、沢山台湾語に浸透した。又、戦後からの新しいものに「おでん」「カラオケ」「漫画」などは台湾語と同時に公用語の台湾華語（台湾中国語）の外来語にもなった。言葉と同時に日本文化の台湾文化への浸透は広くて深いものがあった。

台湾の地名は 1920 年に民政長官（のち総務長官）下村宏が行った台湾地方行政改定及び地名改称の実施によってほぼ確定され、いまも援用されているものが多い。「高雄」「岡山」「玉井」「民雄」「二水」「花壇」「豊原」「清水」「関西」「汐止」「羅東」「玉里」「瑞穂」など、中に日本の地名と同じものもいくつかある。命名された際に日本の地名、文化に因んだものもあった。日本の歴史文化要素にその「原点」を遡らなければ解釈できないものが多いのである。

日本統治時代の日本語文学作品に、日本文化と台湾文化（漢民族文化、原住民文化）との違い、相互の理解、誤解、衝突の場面が沢山描かれている。百年前の 1920 年に台湾旅行をした佐藤春夫の台湾関係作品「蝗の大旅行」「日月潭に遊ぶ記」「旅びと」「霧社」「魔鳥」「女誡扇綺譚」「殖民地の旅」「日章旗の下に」などの諸作を比較文化の視点から読む場合、その言語表現や記述の方法の面白さ、異文化への認識、理解の姿勢が分かる。一方、日本統治時代の台湾人日本語作家は「台湾文学当面の諸問題」として、日本語による創作で、台湾文学は日本内地の文学に対して郷土文学、報告文学、植民地文学と位置づけ、台湾文学における郷土色、面白さを強調し、形式は日本文学と共通していても内容が台湾的であることを主張して、台湾色、台湾文化関係の事物の表現方法などを巡って議論を交わした。近年、日本で活躍している台湾出身の作家、東山彰良、李琴峰、温又柔らの作品に、台湾語や中国語の表現、表記と日本語の表記が併記され、ルビ、表音、表意、補足、翻訳などの機能を働かせ、言語や文化の壁を越えよう、或いは意識的にそうしようとする作家の言語表現が目立つ。比較文化に関わる文学における言語表現の問題であるが、戦前の台湾の日本語文学の問題に繋がっている。

映画の場合、戦後間もない時期に「金色夜叉」が原題名で台湾語映画に作られた。「羅生門」が台湾で

人気を博したことによって、日本語で言う「真相は藪の中」が台湾では「那是一個羅生門」となり、また、「南京の基督」が「一代名妓小鳳」に制作され、「トロッコ」が「軌道」になった。近年、殖民地時代の物語や人物、事件が続々映画化された。「海角七号」（君思う、国境の南）、「賽德克・巴萊」(セデック・バレ)、「KANO」などがあり、「一八九五」や「水色嘉南」「パッテンライ!! ～南の島の水ものがたり～」など八田与一ゆかりのテレビ劇、動画などが、制作された。

戦後の台湾語の歌謡は日本の演歌からメロディーをとり、台湾語に吹き替え或いは改作されたものが非常に多いことは台湾ではよく知られている。戦前、台湾語の歌が先にあって、後に日本語の歌になったものに「雨夜花」（雨の夜の花）があるが、戦前の日本語の歌で戦後、台湾語や台湾華語に吹替えられた歌に、「サヨンの鐘」（月光小夜曲）、「ラバウール小唄」（台灣行進曲）が特別である。「星影のワルツ」「北国の春」「港町ブルース」「昴」など数多くの戦後の流行歌や演歌の名曲が台湾で台湾語や台湾華語の歌詞で歌われたことは贅言を要しない。ここに比較文化の「原点」が存在していると思われる。

言葉が文化の内実を含み、またその具現である。1895 年日本領台後、台湾関係の新語が次第に出来た。『日本国語大辞典』や『辞苑』に、台湾家鴨、台湾銀杏、台湾芋、台湾団扇、台湾海峡、台湾金魚、台湾銀行、台湾軍（－司令官、台湾語、台湾コブラ、台湾猿、台湾山脈、台湾鹿、台湾出兵、台湾諸語、台湾縦貫鉄道、台湾人、台湾神社、台湾杉科、台湾征伐、台湾総督、台湾総督府（－評議会－法院－令）、台湾鯛、台湾茶、台湾泥鰌、台湾小葱、台湾禿、台湾飛蝗、台湾パナマ、台湾波布、台湾蕃族、台湾檜、台湾豹、台湾船、台湾帽、台湾坊主、台湾米、台湾木棉、台湾山猫、台湾百合、台湾栗鼠などが収録されている。字引にない「湾生」も台湾でよく使われていた。近年「台湾ラーメン」が新語となっている。

台湾の団地やビルなどの建築に興味を持つ人は日本の作家の名前が使われていることに気が付くだろう。夏目漱石（夏木漱石）、村上春樹（春上村樹、春上村墅、春上村宿）、菊池寛、正岡子規、若山牧水、永井荷風などである。さすがに、坪内逍遥はまだ使われていないが、それが一つの文化になりそうである。「ノルウェイの森」は「挪威的森林」でコーヒーショップの店名、創作歌謡として、歌われていることがよく知られている。

日台比較文化の「原点」を論じる場合、台湾文化のかなりの部分が日本文化と深く関わっていることが分かる。その言葉や事例はどれほどあるか、簡単に究明できるものではない。戦後、台湾は戒厳令下の時期が 38 年間と長かった。すべてが右で、左がタブーだった時代にも鉄道列車は左側通行であった。全面電化した今もそうである。その理由は日本統治時代の鉄道建設に遡らなければならない。鉄道文化の一例ではあるが、日台比較文化の「原点」を求め、考える良い事例だと思われる。

シンポジウム「比較文化の原点」
C103教室　11:00～12:00

比較文化の原点　―不可欠な AI 技術の利活用

曽秋桂(淡江大学教授、台湾日本語文学会理事)

1.海外の日本語教育現場から文化の原点への気づき

海外の台湾で日本語教師の一員として日本語教育に携わっており、文化の原点という大きな存在に気づいた。言葉遣いとしては日本語の意味が通じるが、言い方はあまり適切ではないと、常に学習者に注意を促している。

例えば、「タバコを吸ってもいいですか」と訊かれたら、教科書にある「いいえ、吸ってはいけません」の否定文を使用してならない。また、「荷物を持って上げましょうか」の代わりに、「荷物をお持ちしましょうか」と言った方が歓迎される。お土産を差し上げる場面も、誠意のこもった気持ちの表れを日本語に直訳すると、「わざわざ母国から買ってきたお土産です」という言い方になるが、それよりも「詰まらないものですが、ほんの気持ちだけのお土産をどうぞ」と謙遜な言い方の方が好ましい。謙虚に表現することを美徳とする日本社会では、「うちの出来の悪い息子は、受験成績が第一志望校の東京大学に行けるか行けないか、微妙です」のように、身内を褒めるよりも貶すことも多く見受けられる。また、日本人なら出かける際に出会った近所の人に、「どこへ」と訊かれたら、「ええ、ちょっとそこまで」と普通に型通りに返答する。しかし、挨拶に近い型通りの質問に対して、真面目に対応して、出かける理由を丁寧に説明する外国人は少なくない。そして、「コーヒーを入れていますが、飲みますか」と訊くと、「今はいいです」との曖昧な返答が返ってくることに度々困惑する。このように、日本語を操る際、言葉の意味が通じただけではなく、言葉の意味を超えた所に文化の原点があると気付かされた。

2.比較文化の原点の解決策

どこの国でも、いずれの時代でもあるように、同じ国の人であっても、ジェネレーションギャップに見られる価値観の差異がある。令和に入って僅か 5 年しか経たないが、平成のコギャルと令和のコギャルとの行動志向の違いについて討論した日本のテレビ番組を見て驚いた。まして違う国が持つ文化の原点も当然に相違している。それぞれの文化の原点、いわば異文化の間では、如何にして意思の疎通を円滑に行うことで相互理解を果たし、相手との信頼関係を構築するかは、比較文化の原点とも言えるべきであろう。意思の疎通がうまくできず誤解が生じてしまえば、人間関係を構築する進捗に滞りが出てしまうこともあろうが、相互の考え方がぶつけ合っていることを恐れずに、その目標言語の国に行ってその言語を実際に使ってみることが、カルチャーショックの解消、異文化コミュニケーションを図ることに役立つため、解決策として勧めたい。要するに、表層の言葉学習から深層のカルチャー学習、異文化コミュニケーションへと深化していくうちに、カルチャーショックが避けて通れなく、目標言語を熟練させる上でも欠かせないプロセスなのである。勿論、文化が浸透して根付くもののため、目標言語の国から母国に帰ると、逆カルチャーショックが生じる場合もよくある。

3.AI 技術に伴う支援を得たデータサイエンティストの実現

今まで当たり前のように国境を自由に行き来すが、しかし、ここ 3 年間海外へ行くことが制限させられてしまった。2019 年年末から 2020 年の年頭にかけて発生し、続いている新型コロナウイルス(COVID-19)パ

ンデミックに対して、世界各国が水際対策を厳しく執り行った故、留学、ビジネス、国際会議が一時期に完全にストップせざるを得なかった。その反面、国境を越えられなくても、人々が相互にオンラインを使用して、国際会議、留学、授業、懇親会、テレワークをリアルタイムに行い、完全にオンラインの生活様式に切り替えられた。従って、コロナ禍を経験した人々の殆どは、機械操作のスキルを身につけて、オンラインに慣れてきっている。とはいえ、オンラインを通して必要とされた要件を最低限に済ませるが、リアルでは問題なく伝わっていた話であっても、オンラインでは正確に伝わっていなかったということが度々起きてしまった。そこで、リアルで対面ならではの良さ、人懐っこさをコロナ禍の前よりも一層身に染みるほど感じられるようになった。にもかかわらず、世間を騒いでいる GPT3 が、今までリリースされてきたサービスでダントツの最速である一方、自然言語処理モデル GPT3 を越えた、強化学習を加えた「InstructGPT」（インストラクト GPT）の使った PPO-ptx モデルの 175 ビリオンにおいてのパラメーター数が GPT3 よりも遙かに上だ[1]と言われた。確かに日進月歩に進化する AI の技術に追いつくことは結構難しいが、AI 技術が制覇する時代においては、比較文化(異文化)の原点に立ち向かい、どのように AI 技術を社会着装し、意思伝達に繋がるかは、重要な課題となる。

こうした時代の中で、「その人間くさいデジタルシステムやサービスを目指す」[2]方向に持っていけば、まだ生き抜く道が開かれると、伊丹敬之は適切なアドバイスをしてくれている。すると、おもてなし精神を重視し、相手の気持ちを慮り、言葉を柔らげて表現することを得意とする日本人が AI 時代では活躍する場を与えられるに違いない。このように、表層の日本語の学習から深層の日本文化の学習へと深化していくうちに、AI 技術を利活用したら、日本語教育現場も使える AI 技術に伴う支援を得たデータサイエンティストの実現が大いに期待されよう。

4.AI の利活用した実例を参考

比較文化(異文化)の原点に立ち向かう場合、下記に紹介する AI の利活用した実例を海外の台湾で実施する日本語教育の現場にも役立つと思われる。というのは、海外の台湾でそれらを教材として学習者に親しんでもらった後、折より学習者が日本へ来て実体験すれば、カルチャーショックの解消、異文化の理解を図る一助となるからである。

まず、注目の研究テーマとして「【文化を守る AI】で貴重な文化を未来に伝える！消滅言語、舞台芸術、伝統産業まで」(2022 年 5 月 5 日)を掲げたサイト[3]がある。そこには、人工知能によるアイヌ語の自動音声認識・合成に成功（AINU 語 AI）[4]した例、AI が数千年にわたって損傷で失われていた古代ギリシャ碑文の文章復元を支援[5]した例、山口県指定無形文化財「鷺流狂言」の伝承・普及を AI 開発プロボノで支援[6]した例が紹介されている。また、「YUMMY SAKE」や「KAORIUM for Sake」のような「日本酒ソムリエ AI」が瞬時に好みの日本酒判定[7]、筆などの工芸品の出来栄えを AI が判断し、品質向上に貢献するような取り

---

[1] https://cdn.openai.com/papers/Training_language_models_to_follow_instructions_with_human_feedback.pdf (2023 年 3 月 15 日閲覧)

[2] 伊丹敬之(2023.2)「GAFA に勝つ方法」『創刊 100 周年文藝春秋　目覚めよ！日本 101 の提言』文藝春秋 p.363

[3] https://studyu.jp/feature/theme/ai6/(2023 年 4 月 8 日閲覧)

[4] https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2020-10-15-0(2023 年 4 月 8 日閲覧)

[5] https://techcrunch.com/(2023 年 4 月 8 日閲覧)

[6] https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000018.000027192.html(2023 年 4 月８日閲覧)

[7] YouTube「プリプリ」でも OK　AI が瞬時に好みの日本酒判定

組み[8]もあるそうである。そして、伊勢丹新宿店のように、2022 年の 1 月にオープンした展示会「“つぐ” KORI-SHOW PROJECT・ISETAN」では、AI や 3D プリンターを活用した「未知の伝統品」の展示、販売が行われた[9]ことも注目を集めている。

また、AI 技術を日本の文化・芸能への導入だが、2013 年に設立した株式会社 ima（あいま）が「日本の経済を支えてきた匠の手によって、脈々と受け継がれてきた伝統産業に、現代ならではの最新テクノロジーを掛け合わせることで、未来へとバトンをつなぐ事業継承のエコシステムを構築する」ことを信念に持ち、「伝統を未来へつなぐ AI と、人が向き合うべき責任」[10]を呼び掛けている。そして、2023 年 4 月 6 日に発表した、SMBC 日興証券とハタプロが合同で設立した web3 関連事業を行う新会社「Proof of Japan 株式会社」[11]が、次世代技術を活用した日本の文化・芸能の支援事業として、「日本の文化・芸能を支援するグローバルな Web3 コミュニティの構築と会員制サービスの提供」、「日本の文化・芸能を次世代に伝承するワークショップの開催」、「次世代の日本の文化・芸能を担う人材の支援」を実施するとのこと[12]である。

米投資銀行ゴールドマン・サックスは 2023 年 3 月 28 日に、人工知能（AI）によって 3 億人分のフルタイム(アメリカとヨーロッパの仕事の 4 分の 1 に当たる・発表者注)の仕事が取って代わられる可能性があるとの報告書[13]を発表した。いずれも AI の時代が逆戻りすることは到底考えにくい。AI に取って代わられる仕事がある反面、きっと AI と関連する仕事が新たに生まれるに違いない。比較文化の原点を思考する場合も、むしろ AI の潮流を直視し、必要とされる AI 技術、スキルを身に付け、前述の不可欠な AI 技術を利活用した方が賢明な選択であろう。

---

8 YouTube「AI で創る未来 – 地域の伝統工芸品を世界へ。ある老舗企業の挑戦」
9 YouTube「伝統文化×最新テクノロジーで作られた服が最強でした」
10 https://advanced.massmedian.co.jp/article/detail/id=5040(2023 年 4 月８日閲覧)
11「SMBC 日興証券ら、web3 関連の新会社「Proof of Japan」設立。日本の文化・芸能支援で」 https://www.neweconomy.jp/posts/307865(2023 年 4 月 8 日閲覧)
12 https://www.neweconomy.jp/posts/307865(2023 年 4 月 8 日閲覧)
13 https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-65108512(2023 年 4 月 8 日閲覧)

シンポジウム「比較文化の原点」
C103教室　11:00～12:00

Lost and Found in Comparison：比較することの限界と可能性

二村洋輔（至学館大学助教）

比較文化学とは、「混沌から一種の統一性を期待する全人類的潜在意識という目に見えないものの発屈のために努力する総合的文化科学」であり、「旧来の学問体系のように、一般的法則性から特殊具体実例を演繹的に検討するのではなくて・・・個々の特殊の事実の検討から始まって、総合的共通点を求め、帰納的に一般的法則性に迫る研究分野であるべきもの」である（芳賀、p. 13）。シンポジウムのテーマである比較文化の「原点」を考える上で、本学会の精神を体現するこの言葉を無視することはできないであろう。

比較文化学自体は比較的新しい学問分野であるが（八尋）、比較することに基づく学問分野は、「比較解剖学」のように、早くは 17 世紀末には登場しており、その後 19 世紀を通じて「比較文法学」、「比較法学」、「比較文学」と多様に展開していった（シュヴレル、p. 7）。「比較の時代」においては、さまざまな世界考察・風俗・文化が比較され相並んで体験されうるということによって意義を与えられるのである」という、比較の試みを称揚する 19 世紀末のニーチェの言葉はあまりに有名だが（p. 50）、その一方で、シュヴレルが危惧しているように、比較という方法の性質上、研究域が拡張されていく過程で、「無謀な問題提起」が助長されてしまう危険性を排除することはできない（p. 10）。

シュヴレルの危惧する「無謀な問題提起」にはさまざまな種類があるであろうが、比較という研究方法自体が内包する根源的な問題の一つとしては、比較対象選択に伴う恣意性が挙げられるだろう。平野幸仁も問題提起しているように、「『比較』なるものは、二つあるいはそれ以上の事物、現象をただ並べてみれば、それで成立するといったような、単純なものではない」（p. 27）。比較対象選択の際には、そこに何らかの必然性がなくてはならない一方で、その結びつきはある意味では恣意的なものでもある。この比較における根源的な問題をよく体現しているのは、アウエルバッハの『ミメーシス』（1946）であろう。ホメロスからヴァージア・ウルフまで広範囲な作品を対象とした、比較文学研究における必須文献である同著にて扱われている作品群は、幾多の作品群の中から必然性により選ばれたものであるというよりは、英訳版の序説でエドワード・サイードが指摘しているように、限られたリソースの中で利用可能であったものの中から選ばれたものなのだ（Said, p. ix-x）。『ミメーシス』が成し遂げた学術的貢献に疑いの余地はないものの、その比較対象の選択においては、恣意性が高いと言わざるを得ないのである。

本発表では、上記のような、比較文化学の原点である、比較という学術的行為が不可避的に内包する限界性を改めて批判的に検討した上で、それらの限界を超克するべく、その可能性についても考察する。

参考文献

シュヴレル，イブ『比較文学入門』小林茂訳、白水社、2009.
ニーチェ，フリードリヒ「人間的な、あまりに人間的な：自由なる精神のための書（上）」浅井真男訳『ニーチェ全集　第 6 巻（第 1 期）』白水社、1980.
芳賀馨「比較文化学序説」『比較文化学論纂』芳賀馨編、開文社出版、1998.

平野幸仁「比較文化論序説(2)」『横浜国立大学人文紀要. 第二類, 語学・文学』第41号、1994、p. 78-61.

八尋春海「学会としての精神」『日本比較文化学会』<https://hikakubunka.jp/?page_id=131>(最終閲覧日: 2023年4月10日).

Said, Edward. "Introduction to the Fiftieth-Anniversary Edition." *Mimesis: The Representation of Reality in Western Literature - New and Expanded Edition*, by Erich Auerbach, translated by Trask, Princeton UP, 2014, pp. iv-xxxii.

研究発表
教室1（C103教室） 第1部 14:00～15:30

『狂人日記』の 10 編の日本語翻訳本の比較分析

王子涵（同志社大学文化情報学研究科博士後期課程） 山内信幸（同志社大学教授）

『狂人日記』は中国の著名な作家である魯迅の代表作に数えられ、また、中国の現代文学における重要な作品の 1 つと見なされている。この作品では、精神的な苦悩を抱える現代の知識人たちが直面する社会的な不条理さや文化的な葛藤を鮮明に描き出している。『狂人日記』は、中国初の白話文小説として、その文体形式と言語スタイルは後の文学創作に大きな影響を与えた。この小説の翻訳においては、翻訳者によって異なる翻訳方針や言語表現が採用されているため、本発表では、自作のコーパスに基づいて、10 編の『狂人日記』の翻訳文を比較分析し、各翻訳の特徴や差異を明らかにする。

コーパスと翻訳学の組み合わせは、新しい研究パラダイムと翻訳学の発展のための新しい視点を提供している。Baker（1995）は、コーパス翻訳学における言語分析の重要性に焦点を当てたものであり、翻訳品質の分析方法や翻訳者のプロファイルの分析方法について詳解し、コーパス翻訳学の研究に重要な理論的基礎と方法論的指導を提供している。また、Laviosa（2002）、胡（2011）、Kruger（2016）らは、翻訳研究におけるコーパス利用の重要性を示し、コーパス翻訳学の理論の発展にも大きな貢献を果たしている。

本発表では、NDL と『世界文学総合目録・第 10 巻』を用いて、今まで出版された『狂人日記』のすべての日本語翻訳本（10 編）を対象に、形態素分析を行い、Wordsmith ツール 8.0 を使用して、語彙レベルと文レベルという 2 つの側面から、データを収集し、統計分析を行う。翻訳本のテキストの長さ、平均文の長さ、語彙の豊かさ、平均語彙の長さと句読点の使用に基づく統計分析を行った結果、それぞれの翻訳本には顕著な違いがあることが導かれる。さらに、翻訳本の語彙から翻訳本の時代性も確認できることが判明する。

結論として、翻訳本においては、翻訳者の言語背景や文化的背景などによって、翻訳の特徴や文体の差異が生じることを主張する。今後は、翻訳におけるこれらの要因をより詳細に調査することで、より高度な翻訳理論の構築につなげていくことが期待される。

参考文献

Baker, M. (1995). Corpora in Translation Studies: An overview and some suggestions for future research. *Target*, 7(2), pp. 223-243.

胡開宝.(2011).『語料庫翻訳学』上海：上海交通大学出版社.

Kruger, H. (2016). *Corpus-based Translation Studies: Research and applications.* London: Routledge.

Laviosa, S. (2002). *Corpus-based Translation Studies: Theory, findings, applications.* New York: Rodopi.

研究発表
教室1（C103教室） 第1部 14:00～15:30

構文的重複語の中国語訳について

馮一峰(北洋大学専任講師)

日本語では、「XX した/している」の形をとる構文的重複語が観察される。それに対し、中国語では、似たような構文的重複語が観察されない。

(1) a. このスープ、野菜野菜してるね。　小野（2015:463）
　b. とても女の子女の子した女の子　小野（2015:470）
(2) a.*这个汤蔬菜蔬菜着。
　b.*非常女孩儿女孩儿着的女孩儿

(1)に示すように、日本語の構文的重複語の語基となっているのは、主に名詞であり、語基の重複は、「した/している」が付加する場合のみ容認される。(2)は筆者が直訳したものである 。(2)に示すように、“XX 着”の形をとる構文的重複語は、中国語において容認されない。したがって、日本語の構文的重複語を中国語に訳す場合、直接訳すことはできないと考えられる。

直接訳すことができない場合、少なくとも二つの選択肢があると考えられる。一つ目は、省略して訳さないことである。二つ目は、なるべく近い意味を持つ表現を用いて訳すことである。中国語には、日本語の「が」や「を」などのような格助詞がないので、基本的に翻訳時には省略される。しかし、(1)において構文的重複語は述語または連体修飾として用いられるので、省略して訳すことが難しい。したがって、構文的重複語を中国語に訳す場合、可能な限り近い意味を持つ表現を用いて訳す必要があると考えられる。

本研究では、構文的重複語の翻訳調査と回答結果の分析を行い、検証を試みた。2022 年 6 月、日本語能力の高い中国人学習者を対象にアンケート調査を実施したところ、回答者が示した中国語訳において重複表現は用いられず、構文的重複語に近い意味を持つ様々な表現が用いられていた。また、分析を行ったところ、原文の構文的重複語の語基となっている名詞の種類によって翻訳時に用いられる表現が異なる可能性が示唆された。本研究の最後には、分析結果を整理し、構文的重複語の語基となっている名詞が「食べ物を表さない名詞」の場合における翻訳時の方略、「食べ物を表す名詞」の場合における翻訳時の方略を提示し、それらを選択する際の判断基準についての考察を行う。

研究発表
教室1（C103教室） 第1部 14:00～15:30

AI 翻訳・自動評価システムは何ができないのか

河内健志（前橋工科大学専任講師） 斎藤隆枝（帝京大学専任講師）

機械翻訳は 1933 年 Peter Troyanskii 以降、幾多の翻訳方式・モデルの変遷を経てきた。2016 年に Google 社は、現在主流となっているニューラルネットワークに深層学習を適用した（以下、AI 翻訳）翻訳サービスの提供を開始し、その翻訳精度の高さから一気に広がっている。また、そのような状況の中、より精度の高い AI 翻訳である DeepL 翻訳などが登場している。さらに QuillBot や Write & Improve などでは AIを用いた英文評価、文法チェック、パラフレーズ、要約するサービス（以下、AI 自動評価システム）を提供している。

このような AI ツールの発達が目覚ましい中で、幸重・蔦田・西山・Gally (2022) では AI 翻訳を利用した大学英語教育が試みられている。AI 自動評価システムを利用したライティング学習や指導の研究も注目を集めつつあり（松井 2020, Fu, Zou, Xie & Cheng 2022）、AI 自動評価システムは学習者に自立的なライティング学習を促すことや学習意欲を向上させる効果があることが示唆されている（Brown 2018）。

河内・斎藤 (2023) らは、英語を専攻しない英語学習者は適切な AI 翻訳・AI 自動評価システムの使用方法をもっと学びたいという学生のニーズが非常に高まっていると報告している。しかし、英語教育に取り入れられつつあり、学生からのニーズが高まっているにも関わらず、それらの適切な使用のための指導法がまだ確立されていない。英語教育に AI 翻訳・AI 自動評価システムを取り入れ、より効果的に使用するためには教員、学生ともにそれぞれのツール特徴を踏まえたうえでの指導、使用は必須と考えられる。

そこで本発表では、AI 翻訳・AI 自動評価システムを用いたライティング指導をより効果的にするため、まず始めにそれぞれのツールで「できること」と「できないこと」を結束性、首尾一貫性、談話標識といった「談話構造」、「文法性」、「コロケーション」の観点から明らかにする。そして、ツールを複数組み合わせることによって、それぞれの欠点を補うことができることを示す。

参考文献（抜粋）

Fu, Q. K., Zou, D., Xie, H., & Cheng, G. (2022) “A review of AWE feedback: types, learning outcomes, and implications,” *Computer Assisted Language Learning* 1–43.

河内健志、斎藤隆枝 (2023) 「日本人英語学習者における機械翻訳の使用実態 ―大学間の比較を通して―」第 29 回大学教育研究フォーラム、3 月 15, 16 日オンライン開催

松井市子 (2020)「AI を活用したライティング能力の育成」『Eiken bulletin 研究助成報告』32: 125-143, 日本英語検定協会

幸重美津子、蔦田和美、西山幹枝、Tom Gally (2022)『AI 翻訳で英語コミュニケーション』三修社

研究発表
教室1（C103教室） 第2部 15:40～17:40

第2言語習得研究におけるオノマトペ習得に関する一考察
―日本語母語話者と日本語学習者のオノマトペ産出例の印象評価分析―

佐古恵里香（流通科学大学特任講師） 山内信幸（同志社大学教授）

佐古（2021）では、中上級日本語学習者における母語（L1）から第2言語（L2）習得の過程において、同じ文章を読んでも、心のなかでイメージされるものは多様であり、異なることを指摘しているが、その後の筆者らの一連の研究では、定性的な調査と定量的な分析の結果に基づいて、学習者の心に抱かれるイメージの諸相についても、言語項目（語、文法項目、発話行為など）と同様に、中間言語における規則性が存在することを主張している。これまで、短歌、詩、短編小説、長編小説、民話、ことわざなどの様々なジャンルの読み物の調査・研究を通じて、イメージが第 2 言語習得理論における中間言語の体系を段階的に構築している証左を示してきた。一方、本発表では、音とイメージと言語の関連性における言語表現に着目をして、音から想起されるイメージがある程度統一されているという条件を設定し、その上で産出された言語表現（オノマトペ表記、文表記）の分析を行い、オノマトペ習得における中間言語の段階性について、考察することを目的としている。

具体的には、日本語母語話者と中上級日本語学習者に録音された音を聞かせて、4 つのタスクを課すという調査を実施する。その結果、まず、特定の録音の音を聞いた場合に被験者が想起したイメージは多言語間で差がほぼ見られなかったことから、被験者が統一されたイメージを持つという条件を成立させるための土台構築の方法を実証することができる。

次に、これらの言語表現（文表記、オノマトペ表記）を分析することで、学習者がどのように L1 や L2 の影響を受けて、第 2 言語を習得しているのか、つまり、中間言語の体系やそれを構成する多元的要因がどのように作用しているのかを解明する手がかりになると位置づけられる。例えば、言語学習において、育った環境などの個人差が大きいなかで、特に、学習者は、L1 の感性、L1 の言語表記の方法、L1 のオノマトペ表記の有無などが複合的にオノマトペ習得に影響を与えて、中間言語を形成していると推察する。

本研究は、イメージ喚起の性質を持つオノマトペを素材に、外界の音から、イメージという曖昧なものを統一化（多言語間におけるシニフィエの統一の試み）させ、外界の音と言語の間にイメージを介在させることによって、より正確に、言語現象を捉えようとする試みであり、本研究の新規性として、新しいアプローチになりうると主張する。

参考文献

佐古恵里香.（2021）「アクティブラーニングを取り入れた読解授業の実践報告―村上春樹における運命と『ノルウェイの森』のイラストからの一考察―」『村上春樹研究叢書』第八輯, pp.361-384.

研究発表
教室1（C103教室） 第2部 15:40～17:40

チャプター冒頭の「状況の *it*」が持つ談話機能

山本茉莉（同志社大学博士前期課程） 山内信幸（同志社大学教授）

従来の英文法では、「時間」や「天候」などを表す際に用いられる *it* は、意味や指示機能を持たない「虚辞」と考えられてきた。一方で、Langacker（2008）は、「状況の *it*」は広範囲な状況全体を指示し、出来事や事態という局所的な範囲へと焦点を移す「ズームイン（zoom in）」という事態解釈に基づく言語表現だと主張している。

著者らは、「状況の *it*」には、代名詞がもつ照応機能に由来する談話機能があるとする立場を採る。そこで、本発表では、談話冒頭の「状況の *it*」には、①語り手の存在を暗示し、②読み手の視線を後続文脈に誘導するという2つの効果をもった「舞台設定装置」の機能があるという仮説を立て、認知言語学の知見を参照し、複数の小説から用例を収集し、仮説の妥当性を検証する。

中右（2013）によると、語り手が「状況の *it*」を使用する心理的動機は、「現場経験」あるいは「当事者意識」である。これらの動機は、池上（2011）の「主観的把握」の定義に一致し、「状況の *it*」は、語り手の主観的把握に基づく描写であることが示唆される。さらに、認知文法の視点からは、町田（2022）の解釈に基づくと、「状況の *it*」は「事態内視点」を用いた言語表現の 1 つであると捉えることができる。また、談話機能として、「状況の *it*」は、談話参与者に新情報を共有することで、Langacker（2008）のいう「談話スペース」を新たに構築する側面があると推察する。これらの考察より、「状況の *it*」が「舞台設定装置」をもつとする本発表の仮説は、十分な妥当性があることを導き出せる。

本調査では、小説チャプター冒頭の「状況の *it*」がもつ「舞台設定装置」の機能が、文脈上、どの程度の範囲にまで及ぶのかを数値的に明示するため、「距離係数」という指数を導入し、計測と分析を行う。その結果、「舞台」の効果は、非常に長い文脈に亘っても持続し、語り手の主観や存在を暗示する機能や読み手の視線を後続文脈に引きつける機能があることが示される。

参考文献

池上嘉彦. (2011).「日本語と主観性・主体性」『ひつじ意味論講座 主観性と主体性』澤田治美 (編), pp. 49-67, 東京: ひつじ書房.

Langacker, Ronald W. (2008). *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明. (監訳). 碓井智子・大谷直輝・木原恵美子・児玉一宏・中野研一郎・深田智・安原和也訳. (2011).『認知文法論序説』東京: 研究社.)

町田章・木原恵美子・小熊猛・井筒勝信. (2022).『認知統語論』東京: くろしお出版.

中右実. (2013).「非人称 it 構文—語法と文法の不可分な全体を構文にみる—」『英語語法研究』第 20 号, pp. 5-34.

研究発表
教室1（C103教室） 第2部 15:40～17:40

個人文体と作品ジャンルの関係性研究 ―著者識別タスクにおける正答率比較を通じて―

柳燁佳（同志社大学大学院博士後期課程） 山内信幸（同志社大学教授）

柳・金（2022）では、作品のジャンルが個人文体（idiosyncrasy）の「入れ物」だと指摘して、同じ著者なら、たとえジャンルが違っても、作品から個人文体を引き出すこと自体が可能であることを実証した。ただ、個人文体が同じ著者のどのジャンルの作品にも等しく濃く現れているかについては、未だ検証が行われずにいる。この課題に対して、本発表では、各ジャンルに対する著者識別タスクの正答率比較を通じて、解決策の提示を試みる。

具体的に、10 名の現役作家による 2 ジャンル（小説と随筆）の作品 20 作ずつからなるコーパスを対象に、任意の n 人（n=2, 3, …, 9, 10）の著者による同じジャンルの作品群から、日本語文章の著者識別に有効とされる 20 種類の特徴量データを抽出し、標準化した後、ランダム・フォレストを分類器とした著者識別タスクにおける正答率を 1 個抜き交差検証法を用いて求める。最後に、各ジャンルにおける同じ特徴量の平均正答率と標準偏差を人数別に集計して、対応あり t 検定でジャンル間有意差の有無を確認する。これによって、作品を個人文体の「溶液」と見立てて、ジャンルによるその濃度の異同の程度を逆算して推測する。

ジャンルによる容量の違いや作品を電子化する際に要する労力などを総合的に考慮して、コーパス構築にあたって、随筆を全文使用するのに対し、小説は本文の冒頭から 5,000 文字強という制約を課すことにした。また、会話文では、著者の個人文体というより、著者が思い描く架空の登場人物たちの性格や挙措を引き立てるため、キャラクター性が濃く発現しているとして、本発表では、会話文を含むあらゆる引用文を排して、地の文のみを分析の対象とした。一方、分類器としてランダム・フォレストのみを用いたのは、当該分類器が日本語文章を対象とした著者識別に関する先行研究において、他分類器に比較して、より安定して高い正答率を記録しただけでなく、正答率が候補著者数の多寡にあまり影響されないと判断したからである。

本発表は、ジャンルという新しい視座を取り入れ、本邦においてこれまで手付かずでいた著者の個人文体と作品のジャンルとの関係性について、比較分析を通じた最初の試みと位置づけられる。小説・随筆という 2 つのジャンルに限った結論ではあるものの、後者に備わるカジュアル性に鑑みれば、学生の作文やブログに載せている記事などにも応用できる可能性が期待され、十分に汎用性の高いものと考えられる。今後、文学作品の代筆疑惑のみならず、剽窃、改竄など文書作成にまつわる不正行為の摘発に役立てる可能性も秘めている。

参考文献

柳燁佳, 金明哲.（2022）「異ジャンル文章が混在した場合における著者識別分析」『データ分析の理論と応用』11(1), pp.1-14.

研究発表
教室1（C103教室） 第2部 15:40～17:40

プロレタリア文学作品とプロレタリア児童文学作品における文体の計量分析

山本真司（同志社大学大学院博士前期課程） 山内信幸(同志社大学教授)

本発表では、テキストマイニングの手法を用い、プロレタリア文学及びプロレタリア児童文学の文体的特徴を分析し、文学作品に投影された大正時代における子供達や労働者の実態を明らかにすることを目的とする。

先行研究としては、葉口（2016: 131）では、プロレタリア児童文学が、「純粋な童謡を享受できない状況の貧しい子どもの姿、つまり現実に存在する〈子ども〉の姿を照らし出した」文学であることを述べている。また、鳥木（2009）は、佐多稲子の『キャラメル工場から』を精読し、現代に通じる貧困と格差の問題の在り方を見直している。

まず、データとしては、プロレタリア文学、プロレタリア児童文学、その他作品を 65 作品ずつ収集した。次に、研究方法では、まず、形態素解析を行い、13 品詞による品詞構成比と MVR、TTR、漢字率、平仮名率、感嘆符率、文長らの指標値を箱ひげ図にし、それぞれの特徴を抽出・可視化した。次に、分析 1 では、3 作品群別に特徴を明らかにするため、13 品詞と 6 指標による elastic net 回帰分析を行った。最後に、分析 2 では、特定された指標から抽出した個別語を用いて、さらに、elastic net 回帰分析を行った。

以上の結果より、まず、プロレタリア児童文学の感嘆符率は、その他作品と比較して、15 倍高く、プロレタリア文学に至っては、35.5 倍高いことが判明した。次に、分析 1 の平均正解率は 0.829 であり、分析 2 の平均正解率は 0.923 であった。また、分析 2 の特徴語として、「俺、労働、會社」が抽出された。最後に、感嘆符を含む文を抽出し、ワードクラウドを作成したところ、プロレタリア文学は「畜生、野郎」、プロレタリア児童文学は「畜生、萬歳、世界一」を内容語としていることが確認できた。

以上の観察と分析によって、プロレタリア文学作品及びプロレタリア児童文学作品ともに、労働に関わる普段の日常が表現されていることが判明した。また、感嘆符を含む文において、プロレタリア文学作品は、プロレタリア児童文学作品と同様に、階級闘争を否定的に表現する傾向にあるが、一部には、階級闘争の現場を称賛的に讃えていることが判明した。これらによって、語彙構造の面から、プロレタリア文学作品及びプロレタリア児童文学作品の文体的特徴を通して、当時の社会実相が明らかにできると結論づけた。

参考文献

葉口英子. (2016).「昭和初期のプロレタリア童謡にみる階級闘争としての子どもの歌」『.環境と経営、静岡産業大学論集』22(2), pp.121-132.

島木圭太. (2009).「プロレタリア文学と児童労働：佐多稲子『キャラメル工場から』の描いたもの」『立命館言語文化研究』21(1), pp.143-154

研究発表
教室2（C102教室） 第1部 14:00～15:00

日中同形語に関する一考察 －日本語の「個性」と中国語の“個性”の比較を通じて―

王天保（台湾国立高雄科技大学副教授）

漢字が使用される日本語と中国語において、語彙が同じ漢字表記であるにもかかわらず使い方や意味が異なる場合がしばしばある。最も理解しやすい例として、学問や専門的な知識を習得することを意味する日本語の「勉強」と、無理をすることを表す中国語の“勉強”が挙げられる。日中同形の漢字を使う二語の意味は明らかに異なるため、初級日本語学習者であってもこの二つの表現を混同することはほとんどないだろう。しかし、それほど判断しやすくない語彙もあり、例えば筆者が担当した上級日本語会話、作文の授業活動及び履修者に提出してもらった課題の中に、下記の誤用が出てきた。

(1) 私は個性が良い人だといわれている。
(2) 彼女の個性は優しい。
(3) あの人、個性が悪そう。
(4) 個性が合わないからうまくチームワークができるかどうかわからない。

自己アピールや、グループ分けしてもらう際に気付いた表現であるが、(1) (2) (3) (4) はいずれも「個性」を「性格」に置き換えると自然な表現となる。しかし意味が似ている二語の使い分けは説明し難く、辞書[1]の解釈に頼っても母語話者ではない人にとって実際の使い方の相違が理解し難いと言える。

また (1) (2) (3) の特徴として、日本語の「個性」は後ろにプラス・マイナス評価を表す「良い」「悪い」といった表現や、性格を表す形容詞がめったに来ないのに対し、誤用例ではプラス・マイナス評価や、性格を表す形容詞成分が「個性」に後接することが観察されている。この特徴は中国語の“個性”の使い方とほとんど同じ、(1) (2) (3) を中国語に訳すと“大家都說我是個性很好的人”“她的個性很溫柔”“那個人個性好像很差”といった自然な中国語の表現となる。つまり、中国語の“個性”の用法の影響により (1) (2) (3) の誤用が生じると推測できる。こういった誤用を減らすため、国語辞書の説明は足らず、「個性」及び“個性”にまつわる共起関係、品詞などについてより詳しい考察が必要とされる。そのため、本発表は現代日本語書き言葉均衡コーパス及び台湾中央研究院平衡語料庫を利用し、「個性」及び“個性”の例文を集め、二語に関わる修飾関係、前接及び後接する語彙を考察し、使い方の異同について明らかにすることを目的とする。またその結果を日本語教育にも生かしたい。

[1] デジタル大辞泉による「個性」及び「性格」の第一義は下記となっている。
（個性）個人または個体・物体に備わった、そのもの特有の性質。個人性。パーソナリティ（性格）行動のしかたに現れる、その人に固有の感情・意志の傾向

研究発表
教室2（C102教室） 第1部 14:00～15:00

日中同形動詞「拡大」“扩大”の意味用法に関する一考察

蘇欣（東北大学国際文化研究科博士後期課程）
沈章文（東北大学国際文化研究科博士後期課程）

第二言語を学習する初期の段階においては、母語で得た知識を利用できればそれだけ効果的である。日本語の語種は、和語、漢語、外来語、混種語の 4 種類に分けられる。中国語は簡体字（中国大陸）と繁体字（台湾、香港）に分けることができる。そして、日本語の漢語は中国語に対応する語も多くあるため、中国人日本語学習者に有利とされてきた。1970 年代から、文化庁(1978)をはじめ、日中両言語における対照研究が多くなっている。本稿では、「拡大」 “扩大”という日中同形語を取り上げ、両言語のコーパスを利用し、分析することにより、用法の検証を行う。また、比較研究を行う際、品詞の違いも意味に影響を与えるため、本稿は日本語の「拡大」のサ変動詞用法（847 例）と中国語“扩大”の動詞用法を研究対象として検討を進めた（7601 例）。

文化庁（1978）では、「拡大」という語を「S（same）」（日中両国語における意味が同じ、または、極めて近いもの）に分類しているが、果たして意味が同じなのか、それとも意味が近いのか。本研究では、「拡大」“扩大”のコロケーションの主体について、日本語コーパスと中国語コーパスを利用し、日中両国における用法の異同を検討する。日本語のコーパスは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用し、文字列検索から「拡大」を検索し、得られたデータを分析の対象とする。中国語のコーパスは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を利用し、「扩大/v」で検索したデータを分析対象とする。

日本語でも中国語でも「拡大」の主体は「範囲」、「影響」、「規模」、「格差」に関するものが共通している。しかし、中国語のコーパスにおいて、「拡大」の主体として「民主」、「试点」、「就业」などが見られたが、日本語のコーパスには該当する例文がみられなかった。一方、日本語のコーパスにおいて、「拡大」の主体として「被害」の例が見られたが、中国語のコーパスには該当する例文がみられなかった。

以上のように、日中両言語において、「拡大」の意味は大体同じであるが、ズレがあることが明らかとなった。

参考文献

文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
荀恩东，饶高琦，肖晓悦，臧娇娇（2016）「大数据背景下 BCC 语料库的研制」『语料库语言学』，pp. 93-118.
国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』

研究発表
教室2（C102教室） 第2部 15:40～17:40

漢字形容動詞の連体形「○○な」「○○的な」についての考察

陳志文（国立高雄大学　東アジア言語学科教授）

要 旨

本発表ではいわゆる形容動詞の連体修飾構造である「＜漢語形容動詞語幹＞な＋名詞」と「＜漢語名詞＞的な＋名詞」との相違に着目する。例えば、以下の例を見てみよう。

（1）老人のことだから、その日体の調子がかんばしくなくて家に臥せっている場合も考えられる。この急な階段の上下は、若く健康な人間でも、億劫になる。(『人間の証明』1977)

（2）痩せて胸が小さくなったというのはもともと余分な脂肪だったか極度な食事制限等でホルモンバランスが崩れてしまった為です。健康的な食生活と毎日の運動が大切です。(『Yahoo!知恵袋』2005)

（1）と（2）の例文を見ると、「健康な」「健康的な」ではどちらも「名詞」（体言）が修飾できることが分かる。言い換えれば、連体修飾の際に「健康な＋名詞」「健康的な＋名詞」、におけるどちらの形式も用いることができるということになる。文法的に問題がない上に意味的にも近い。だが、なぜこのことが起こるのか、興味深い問題である。

そこで、本発表では、まず、国立国語研究所によって 2006 年に公開された「現代雑誌 200 万字言語調査語彙表」から使用度数が 50 以上で、「名詞・形容動詞」の用法がある語彙を洗い出してみたところ、合計 61 語あることが分かった。次に『現代日本語書き言葉均衡コーパス（中納言）』を資料として「＜漢語形容動詞語幹＞な＋名詞」「＜漢語名詞＞的な＋名詞」の例文を抽出し、両者の相違を考察した。その結果、下記のような結論を得た。

①現代日本語において「形容動詞・名詞」という品詞性を有する語彙の連体形では　「な修飾」が基本形であるが、こうした類の語彙のすべてに「な修飾」「的な修飾」という二通りの連体修飾用法があるわけではない。

②一見「なんのゆれもなく」「なんの予測の余地もなく」社会通念からすぐその語彙が含有する抽象的概念に合致しているかどうか判断が付く場合、または、「唯一」「他には考えられない」場合、「な修飾」が用いられる。

③「～的」における「のような、らしく」などの意味が発揮され、複数の、同類の物や事態などもあることをほのめかす場合、及び単なる「～の」という意味を表すような場合、「的な修飾」が用いられる。

だが、このような結論が、現代日本語における同じ構造の文について説明しきれるものであるかについてさらなる検証の必要がある。今後の課題としたい。

研究発表
教室2（C102教室） 第2部 15:40～17:40

BCCWJ における「ブレイク」のふるまいと意味機能
―雑誌記事見出しとの比較を中心に―

大谷鉄平（北陸大学講師）

カタカナ語「ブレイク」は、その語義に関し、小学館『日本国語大辞典』に「⑤売り上げや人気が飛躍的に伸びること」があり、見出し文に用いられる際、「事実上の広告文」と解される場合がある。大谷（2023）では Web OYA-bunko 収録の雑誌記事見出し文 2000 件を対象に、①「『ブレイク』の対象となる事物の傾向」、②「文脈や言い回しの傾向」に関する調査を行い、①については「『ヒト』、それもいわゆるタレント・芸能人と呼ばれる人々が対象となることが多い」、②については「対象が『これからブレイクする』との文脈が多い」との結果を得た。ただし、見出し文は「本文の内容に関する概要を非常に短い文で表したもの」というある種特殊な文章であり、一般の文章中でのふるまいについては課題となっていた。そこで今回、BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス、中納言）中での「ブレイク[1]」を対象に同様の手法で調査[2]を行い、見出し文の場合との異同について検討を行った。

まず、文章のジャンルについては「知恵袋:37」「ブログ:56」「雑誌:63」と偏りが見られ、公的であらたまった（＝かたい）文章には用いられにくいことが分かった。

次に、「『ブレイク』の対象となる事物の傾向」については、雑誌記事見出しの場合と同様、「俳優」「歌手」「芸人」などメディアに登場するタレント・芸能人が半数を超える結果となったが、ブランドやファッションなど、「モノ・商品」も一定数確認された。

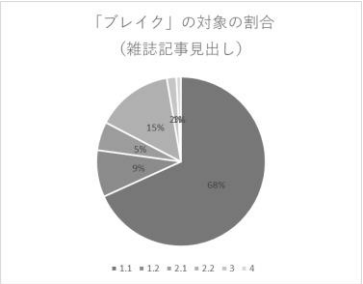

図 1 「ブレイク」の対象（左:雑誌記事見出し（大谷（2023））、右:BCCWJ）[3]

一方、「文脈や言い回しの傾向」については、「大:112」「中:53」が多い（大ブレイク、ブレイク中）点は見出し文と同様であったものの、「対象が『これからブレイクする』との文脈」を示唆する語句は「予感:11」にとどまり、見出し文と異なる結果となった。

[1] 加えて「ブレーク」についても調査を行った。なお、適切でない用例（ブレイクスルー、コーヒーブレイク、ウィリアム・ブレイク、など）を除外した結果、「ブレイク」は 156 例、「ブレーク」は 33 例が得られた。本調査ではこれらを合わせた 189 例を対象とし、便宜的に「ブレイク等」と称する。
[2] KH Coder を用いたテキストマイニングで、頻出語ならびに関連語に関する調査が中心である。
[3] 図中の 1.1、1.2 などは分類枠を指すが、紙幅の都合上、具体的な説明は発表時に PPT で行う。

研究発表
教室2（C102教室） 第2部 15:40～17:40

自己像を演出する人称代名詞 ―アニメにおける日タイ一人称表現の比較―

松井夏津紀（京都外国語大学非常勤講師）

日本のアニメの登場人物が用いる「わたし」、「あたし」、「うち」、「俺」、「僕」、「自分」のような一人称代名詞が、タイ語吹き替え版やタイ語字幕版では、どのような一人称表現が用いられるのかを、タイ語翻訳版のセリフデータを分析し、考察する。独自のタイ語話しことばコーパスを利用し、日本語とタイ語の一人称代名詞の相関関係を明らかにした上で、タイ語翻訳版の一人称表現が選択される際の、機能的意味基準を提示する。

近年、日本のマンガやアニメ産業の海外展開が拡大しているが、タイにも日本のマンガやアニメファンが多く、「オタク文化」にも一定の理解が示されていると言ってもよいだろう。日系の大手書店には、日本のあらゆるジャンルのマンガのタイ語訳が並び、幼少のころから日本のマンガやアニメに触れているタイ人も多く、現在では Netflix などの配信動画サービスで日本でヒットしているアニメ作品の最新版を視聴することができる。マンガやアニメがきっかけで日本語学習を始めるというケースも少なくないが、多くのタイ人は日本のマンガをタイ語翻訳版で読み、アニメをタイ語字幕版やタイ語吹き替え版で視聴している。

マンガやアニメには、様々なキャラクターが登場するが、その人物が使う一人称の人称表現がその「キャラ」を演出する大きな役割を果たしている。例えば、「俺」を使用するのか、「僕」を使用するのかで、「キャラ」の印象は大きく異なる。日本語やタイ語のような言語では、一人称を表す場合、英語の“I”やフランス語の“je”などの西欧語の人称代名詞と異なり、複数の語彙項目から話し手による任意の選択が行われる。日本語やタイ語の人称表現には、人称代名詞をはじめ、名前、親族名称、職業・職位名などが用いられるが、このような人称表現を持つ言語では、話し手が、年齢、性別、社会的地位、人物像、及び、発話時の感情や場面状況、聞き手との関係性などを考慮し、発話環境に適した人称表現が選択される。このような人称表現は、相手との社会的関係や人間関係を明示する機能を持つので、円滑なコミュニケーションを実現させる要因にもなれば、他者と一定の心的距離を置くツールにもなる。

タイ語の人称表現は日本語より数が多く、より複雑な機能的意味体系が確認される。日本のマンガやアニメで使用される一人称表現を、英語やフランス語に翻訳する場合、人称表現が集約される形になるが（「俺」も「僕」も“I”や“je”）、タイ語は日本語の人称表現より選択の幅が広いため、翻訳する際、1 つの人称表現が細分化されることがある。本発表では、アニメのタイ語字幕版とタイ語吹き替え版のタイ語一人称代名詞に「階級スケール」、「親密度スケール」、「堅苦しさスケール」の 3 つのスケールを総合した「形式度レベル」を付与し、日本語の一人称代名詞の機能的意味と比較し、アニメで用いられる日タイの一人称代名詞の意味範疇を考察する。

研究発表
教室2（C102教室） 第2部 15:40～17:40

インドネシア語と日本語における依頼表現の対照研究

ズルフィカル・ラーマン（中国・四国支部／広島大学人間社会科学研究科博士課程後期）

本研究は、日本語とインドネシア語の依頼表現の使用実態を理解し、どのように依頼表現を使い分けているかを明らかにすることを目的としている。日本人は話し手と聞き手の対人関係により依頼表現を使い分けるが、インドネシア人が 2 つの依頼表現 mohon（願う）と tolong（助ける）をどのように使い分けているか明らかになっていない。本研究は SNS と BTSJ 日常会話コーパスを用い、会話内に出現する依頼表現を収集した。それらを上下・親疎関係の観点から分類し、両言語における依頼表現を分析した。結果として、インドネシア語の依頼表現2つは上下関係による使い分けは見られず、親疎関係により使い分けられることが明らかになった。一方、日本語は敬語の使用と文体の選択を持つ言語であるため、上下関係を重視することが確認できた。両言語の共通点として「不特定」の間柄に対し最も丁寧な依頼表現を選択することが明らかになった。